

下肢静脈瘤

川口市立医療センター

心臓血管外科

きたなか

北中

ようすけ

陽介



下肢静脈瘤とは足の血管が拡張し、こぶのようになる病気です。下肢静脈瘤は、脚のだるさ、むくみやこむらがえり、進行すると色素沈着や皮膚潰瘍などの症状が出てきます。特に昼過ぎから夕方にかけて症状が強くなるのが特徴です。

静脈の中には静脈弁があり、血液の逆流を防止しています。この弁が壊れると、血液が逆流します。血液が溜まった状態が長時間続くと、徐々に静脈の壁が引き伸ばされて太くなり、静脈がグネグネと曲がりくねった状態となります。この状態が「下肢静脈瘤」です。

下肢静脈瘤は、日本人の約9%にみられ、患者数は1,000万人以上いるという報告もあります。また、男性よりも女性に多い疾患です。

診断は、下肢超音波検査で行います。治療は、血管を引き抜く(ストリッピング)手術、カテーテルを使用し、血管の内側から焼いてふさぐ血管内焼灼術(ラジオ波治療やレーザー治療)、医療用の血管接着剤を用いた血管内接着剤治療、静脈に薬剤を注射して固める硬化療法、手術や薬剤を用いず、運動やマッサージなどによる生活習慣の改善や弾性ストッキングの着用を中心とした保存的治療があります。

下肢超音波検査の結果をもとに、患者の背景、既往歴などを総合的に判断し、最善の治療法を決定します。当院では下肢静脈瘤治療の専門医、指導医が在籍しております。心当たりのあるかたは、一度、近隣のお医者さんにかかっていたいただき、当院での診療が必要な場合は、紹介状をご持参の上、お越しく下さい。